

## 保育実習指導を考える—(1)—乳児院—

本間 真 宏・阿 部 和 子<sup>\*</sup>

(昭和63年9月30日受理)

### A Study on the Nursery Training Guidance

—Custodial care homes for infants—

Masahiro HONMA and Kazuko ABE

(Received September 30, 1988)

#### はじめに

私たちはかつて「保育実習指導」におけるいくつかの問題について共同研究をしたことがある<sup>1)</sup>。また「子ども」を理解するということについて、これまで大分話しあってきた<sup>2)</sup>。阿部は昭和44年度の児童学専攻の卒業生であるが、本務校で乳児保育及び保育実習を担当しているとともに、縁あって短期大学部保育科での講義を担当することになり(「養護原理Ⅰ」)、いろいろと考えさせられることが多くなった。とりわけ「実習指導」はともすれば情性に流されがちであるだけに、担当する者にとってはつねにリフレッシュしていかなくてはならないことを話し合ってきた<sup>3)</sup>。

さて実習が多くの子生にとって社会人として生活する最初の場所であることはいうまでもない。このことから養成校の実習担当者は実習前のオリエンテーションにおいて、「社会人としての行動」についても相当に指導しなくてはならない。そして実習中、社会人としても、実習生としても、できるだけ失敗のないように細心の注意をはらうのである。そうするためには実習の意味について、また実習のあり方そのものの意味をつねに問い直していかなければならない。

実習に「生き方」を模索する意味を持たせるならば、実習期間中、失敗もするし困った体験もたくさんする(実習中に)困らないようなオリエンテーションはしない方がベターということになろう<sup>4)</sup>。実習生は実習期間中をけっしてスマートに過す必要はない。つまり、不器用に実習(生活)しながら、そこからひとつひとつの

行動の意味を考える(そのためには指導者の適切な助言と励ましが必要になる)。こうした体験を重ねながら実習生が何かに気づく体験が大切なのである。

このような実習はこうした考え方に共感してもらえるような実習先が求められる。このような実習指導には、保育の本質・保育者の資質等と深くかかわってくる。指導者としての力量が問われるのでかなりの困難さともなうであろう。養成校は、これまで以上に実習先と連携して、共に子どものための保育者育成に努めることがつねに実習指導の課題として存在している。

さて、私たちは「感性—気づく—」ことのできる保育者の育成ということをつねに考えてきた。実習は、理論・知識・技術等よりも、まず体当りで種々の経験し、そのなかで子どもについて、保育について発見することに意義をみとめることができる。私たちは、この見方に相当に心引かれるものがある。出来れば一度でいいから、そのような実習を試してみたいと思いつつも、新しい場面面で不安と緊張に打ち勝って、ひとつひとつの出来事を新鮮に受けとめ、その意味を考えていけるように実習する人たちは育ってきているのだろうかという思いがつねにある。

実習を意味あるものにしていくためにひとつひとつの出来事に「気づく」ことが大切であり、「気づく」ための準備を養成校はしなければならぬ。その準備のひとつが保育・養育に関する理論・知識・技術の伝達である。ここで注意すべきことは、それに捉われて、そこからしか子どもにかかわれない保育者の養成につながるという危険性もあるが、それでもなお専門の理論等は必要である。子どもは、保育は、その理論等からみたらどう見えるか、それで本当にそこで生きている子どもが理解でき、

\* 社会福祉研究室

\* 聖徳学園短期大学

いきいきとかかわることが出来るかどうか……。

そこからのみみることの不都合さに気づく保育者に育つために、不都合に気づく体験を通して、理論・知識・技術をますます習熟させ、さらにそれにのみ頼らない柔軟な感性を育てていくことが養成における大きな目的となるであろう。そのためには実習に出す時期の検討、また実習は1回限りで良いのか、期間は10日間で良いのか等の検討課題がつねに考えられなくてはならない。このような課題解決に取り組むための、ひとつの作業が本稿の目的である。

### 乳児院での実習

いろいろな児童福祉施設があるなかで、多くの学生が希望するのが乳児院である<sup>5)</sup>。それからみていくことにしたい。

#### (1)乳児院理解のために

まず乳児院の目的と役割についてみておこう。児童福祉法第37条は「乳児院は乳児を入院させ、これを養育することを目的とする」と規定している。ではどのような乳児が、どのような理由で入院し、どのような生活をしているのだろうか。児童福祉法が制定されてから現在に致るまでを、おおまかにふり返りながら乳児院の目的・役割について考えてみたい<sup>6)</sup>。

##### (イ)児童福祉法が制定された昭和20年代

終戦後、国内は大変な混雑状態にあり、巷には戦災孤児・浮浪児があふれていた。この子たちのために国は浮浪児保護のための応急措置（昭和21年）をしたが対応しきれず児童福祉法が公布（昭和22年）され、乳児院・養護施設などが設置されることになった<sup>7)</sup>。このような状況のもとで、昭和20年代前半における入所児の半数以上が孤児・棄児であった。また入所した子どもたちは栄養失調・疾病を持った乳児が多く、昭和25年までの乳児院における乳児の死亡率の努力目標が20%といわれるほどの状態であった。

そのような状態での乳児院の養護は、ミルクがない・食べ物が無い時代であり、どのように栄養をとるかまた疾病おもには下痢をどう止めるかが大きな課題であった。加えて人手不足と保育についての基盤がないなどから病氣予防に重点を置いたマスクをした保育またガラス越し保育が展開された。20年代後半には抗生物質・調整粉乳の使用で死亡率が減ってきて落ち着きを見せ始めたが、

その頃からいわゆる「ホスピタリズム論争<sup>8)</sup>」が展開されていくのである。

##### (ロ)昭和30年代

世の中が戦後の貧困から解放され始め、いわゆる経済の高度成長期に入り、全般的にみると活力に満ちた時代となる。そして福祉に関する動きも活発になる（例えば昭和31年、全国児童福祉大会、34年、児童権利宣言、36年3才児検診、38年、厚生省児童福祉白書発表等）、乳児院の養育内容に関しては、20年代後半に言われた「ホスピタリズム論争」が盛んになり、児童処遇と職員待遇改善が見直され始めた。さらに、これまでの閉鎖的保育（つまり感染を恐れた病氣対策）から、外に向けて放された保育への試みが始まる。

すなわち子どもをベットからおろし床を這わせたり、廊下を歩かせたり、また玩具による遊ばせ方の研究・手作り玩具等、さらに子どもに合わせた建物の改築等子どもをとりまく生活環境の見直しがはじめられていった。そのなかで何よりも子どもの育つ環境としては、疾病対策とともに人間同士の触れ合いが大事であることに気づき、東京八王子乳児院ではマスクを外して保育にあたるようになった。また東京都は乳児院に心理指導員を配置し、子どもの心身の発達についても考えられるようになった。

このような努力の結果、いわゆるオールドタイプのホスピタリズムは急速に改善に向っていく。以上のような努力の一方で、今日の乳児院がかかえている問題がほぼ出そろった。つまり空床問題、年齢超過児の問題、条件（障害）乳児の処遇、措置基準、職員の労務管理、短期入所児の増加対策等がそれである。

##### (ハ)昭和40年代

世の中は高度成長時代のまっただなかで、43年には資本主義国ではアメリカについて第2位の経済大国になる。昭和元祿とも呼ばれた。このような状態を反映して、児童福祉も措置費が伸びて物的・質的にも充実する（例えば40年、母子保健法制定・公布、47年、児童手当法公布、同年、乳児院最低基準改正案、49年、勤労婦人福祉法公布等）。

乳児院の養育に関しては、昭和20年代後半にはじまった「ホスピタリズム論争」の成果が実践に移されるようになる。たとえば食事に関しては、1つの食器から3～4人の子へ（20～30年代）、1人ずつの食器へ（30年代後半）、1対1の食事介助（40年代）へというように、

ひとつずつ生かされていった。また30年代の開放への保育が集団保育ということばに代り、保育計画表が作成されはじめる。またこれまでの実践と研究の成果が理論づけられ、子どもの個性の尊重、集団の中の個別化が言われ、担当保育者制が導入された。こうしてオールドタイプのホスピタリズムはほぼ克服されたといわれる。この背景には乳児院の職員の大幅な待遇改善があげられよう。すなわち職員定数が2対1（昭和24・25年では5対1、27年には3対1、39年には2.5対1、45年には2対1で、さらに51年には1.7対1で現在に至る）になり、有資格保育者が約7割、栄養士の配置等職員の労働力軽減がはかられ、40年代後半には、職員の精神衛生面での問題までもとり上げられるようになった。このような十分に子どもに目を向けられる状態が、オールドタイプのホスピタリズムを克服する大きな要因になったと考えられている。

このような改善努力と並行して、空床問題はますます深刻になり、40年代には充足率が80%を割るようになった。また社会福祉全体の動きとして40年代は在宅ケアの方向、高齢化社会対策としての老人福祉のあり方が社会問題となっていた。

#### (一)昭和50年代

昭和48年を当時の三木内閣は「福祉元年」と呼び、ますます福祉対策が充実するかにみえたが、48・49年のオイルショックを契機に世の中は不況が深刻化し、低成長時代に入った。福祉見直し論が言われ、施設は入所型から通園型へ、いわゆる在宅ケアの充実と地域社会のなかでの児童福祉という方向に向うことになった。また社会問題としては、ベビーホテル問題がクローズアップされた。このような社会の動きと乳児院のかかえる空床問題とが相まって、乳児院の役割が見直される時代になった。

すなわち短期入所児の増加、親元引き取りの増加（7割近く）ベビーホテルからの問題提起に対して、保育所が対応しきれない保育要求に対するものとして、乳児院でのデイケア保育、ショートスティ等、これまでの入所型であり社会と交流のなかった乳児院から大きく社会に開かれた施設として機能しようと、その方法を模索し始めたのであった。保育の内容はますます向上し、園外保育の定着、また自由な保育形態をとり、社会のなかでの体験を大切にす等により、子どもの望ましい発達に視点を置いた保育・養育が展開され、子ども達は運動面・情緒面・言語面なども大きな伸びを見せはじめた。こうした乳児院児童の発達の充実、地域に密着し、地域の

要求する保育を実現するための方法を、さらに検討することとして60年代へと引き継がれることになる。

これまで、おおまかに乳児院の戦後の歴史を見てきたが、乳児院の現在は上述のような時代の流れのなかに位置づけられるものであり、乳児院の役割はそこで生活する子どもたちとの生活のなかで、その子ども達の発達をいかに保障するかという視点、社会全体の大きなうねりのなかで変化と合わせて考えていかなければならない。

これからの保育者になろうとする人たちはこのような乳児院の過去を踏まえて、これからの役割をしっかりと自覚していかなければならないのである。

## (2)乳児院実習の展開

### (イ)オリエンテーション

乳児院での実習の目的を達成するための準備はそれまでの授業をふまえて約1ヶ月前頃から始められる。実習前の具体的な動きについて時系列に従って述べていくことにしたい。

まず実習先の配属発表とその調整がなされるなかで、オリエンテーションが進められる。その主なものは実習の目的や仕方、実習の心得、実習録の書き方、必要書類の作成、身体に関すること、細菌検査の方法、そして社会人としての常識等である。とくに乳児院理解についてのオリエンテーションとして、授業の復習、他学科との関連、乳児院実習での注意事項、VTR等を用いながら乳児院での実際の生活をできるだけ理解させる。

これらと並行して、個々の実習先の乳児院の資料（実習先からの配布物・パンフレット・先輩の残してくれた実習中のアドバイス等）を見たりする。こうして学生たちはこれから実習する具体的な乳児院の姿を知り個性に触れながら、自分が具体的な場で何を目的にどのように動こうとしているのかを不安と期待の高まりのなかで、それなりに明確にしようとしている。

また実習先でのオリエンテーションはだいたい開始1～2週間前に行われる。乳児院の目的・役割、入所理由、入所手続き、乳児院の沿革、養育目標、地域環境、建物の規模・構造、職員の構成、児童の構成等について、まず話される。ついで実習期間をどう過ごすか、乳児院の一日の流れ、実習期間中の日程・行事等を知る。とくに実習中の配属クラスと指導者との初めての出会いとなる。さいごに実習前に用意することとして、紹介された本を読んで感想文を書く、実習中の自分の目的をレポート

する、実習中に行うあそび等を考えてくること、実習中の服装・持ち物・費用等について指示される。こうしたオリエンテーションを受け、その準備をしながら、学生は実習への思いをひとつひとつの行為を通して高めていくようである。

#### (ロ)実習開始

これから、ある実習生の実習録に従って、どのような目的で、どのように実習を行い、またどのような助言を受け、どのように成長していったか、実習生の成長の軌跡を考えてみたい。この実習生は10日間の実習期間のうち、最初の5日間で1歳児組で、残りを0歳前半組で実習している。

まず第1日目の様子をみよう。何事も初体験の時である。課題である「私の実習の目標」を提出する。ついて日課表によって基本的な一日の生活の流れについて知る(省略)。それにそった保育者の仕事の内容(いわゆる業務内容)を理解する(省略)。さらに、生活上(実習上)の注意(実習にあたっての具体的な注意事項)について説明を受け、実習に入ることになる。

#### 乳児院実習における私の課題

たった10日間という短い実習中で、施設(乳児院)というものはどういう所かを理解し、また、その中で生活している子ども達の様子を観察し学んでいきたい。

そのためにも、子ども達の顔と名前を早く一致し、1日の流れを理解したい。その上で、子ども達、1人1人の月令のちがいを知り、成長・発達というものを、目で実際にみてわかりたい。

何をやるにも初めてのことはばかりで、とまどってばかりで先生方に御迷惑をかけることと思いますが、先生のおっしゃる事をよく聞き、てきぱきと行動し、経験したことをきちんと自分のものに吸収できるようにがんばりたい。また慣れてきたら、先生に言われて動くのではなく、自分から進んで動けるようにしたいものです。

また、子ども達の家庭の複雑な事情に、自分の感情を入れないように、全員の子どもに平等に接し、客観的に観察するようにしたい。そして、子どもが何かいけないうことをしたら、ただ叱るのでなく、なぜそんな事をしたのか、理由を理解した上で、その子の個性というものを大切にあげたい。また注意した後も注意しっぱなしではなく、何か良い所を見つけほめてあげることも忘れないようにした

い。

とにかく、早く子ども達の中に溶け込み、子ども達から信頼されるようにがんばりたい。

#### (ハ)子どもとの出会い<sup>9)</sup>

さて配属されたクラス(1歳児組)に行く、昼食の時間ということもあって、すぐ保育者の助手の役(お手ふきをまとめて消毒する)で、そこでの生活に参加している。子どもはひとかたまりに見え、子どもの行動の流れを追うことで勢いっぱいの子がうかがえる。そして子ども達が午睡から目覚めて排泄をすませ、着替えを始めた時に、ようやく実習生は子どものかかわりが持てるようになる。その様子を実習録からみてみよう。

実習初日にはじめて関わりをもった子どもがTくん、着がえをさせたのですが、月令や個人差などが理解できずに、ずぼんをはかせる時に「さあー立っしょうねー」と言って立たせようとしてしまいました。でも、立たなかったのですわったまま、ずぼんをはかせたのですが、なかなか思うようにはかせられず、だんだんTくんが泣き出しそうになってしまったので困ってしまいました。Tくんはすぐだきついてきたり、ひざにすわってくるので、ついTくんといっしょに遊ぶことが多くなってしまった。また2歳児組の子ども達は、自分でブロックを組み立てて、自分で遊んでいるので、なかなか子どもの中に入れなかったりもした。

この記録から、学校では勉強してきたはずなのに、実際の子どものかかわりのなかではすぐ行動に移せず困った経験、それはほとんどの実習生に共通している。このような困った経験を繰り返し、困ったことの解決に努力することをとおして、習得した知識を自分のものにしていくのではなかろうか。実習中は困った経験をたくさんすることにも意義があるというべきであろう。

また子どもからの働きかけには応ずるが、自分から子ども達のなかに入っていききたい。しかしどのようにして入って行って良いかわからず、その日の実習終了後、指導者から子どもたちの遊びに入っていく時のやり方等についての指導を受け、明日への希望を持つ。初日の感想として次のように書かれている。

実習の初日になにも分らず御迷惑をおかけしました。幼稚園の実習とはぜんぜんちがいが、子ども達もとっても小

さくて、話し言葉もわからずにとまどってしまいました。でもKちゃんやSくんなどは、いろいろと話しかけてくれるので、いっしょけんめい聞いて話していることを理解できるようになりたいです。

今日うれしかったことは、帰りにみんなにあいさつしていたら、みんなが「実習ママ」とよんでくれたので、とってもうれしかったです。

この感想から、実習生が子ども達からの働きかけに答えようががんばろうとしていること、子ども達が「実習ママ」と呼んでくれたことに勇気づけられ、励まされて明日への希望と課題を発見していることがわかる。実習生が明日へと希望を持って取り組める意欲を持つのは、つまりは実習生が将来において仕事とし、かかわろうとする子どもたち自身によってであると言えるのである。

2日目の様子はどうかであろうか。日誌では、子どもたちの活動、実習生の動きについて、記録はやや細かくなっている。

今日は散歩に連れていってもらい、写真やテレビなどでしかみたことのないワゴン車を身近にみて、実際にさわれ押すこともできた。結構重たく、自分の思うように動かず、この上に子どもが何人も乗ったら押すのも大変だなと思った。ワゴンの中でもバタバタ動き回っているのかな、と思ったらみんな手すりにきちんとつかまって立っているのでビックリした。またK先生のワゴンに乗りたくい為に、大きな声で泣いているMちゃんの姿をみて“あー、担当の先生というのは本当に子どものママなんだなあ”と思い感動した。私も子どもに泣いて求められるような保母になればいいなと思った。

公園について、何してあそぶのかなと思ったら、みんな様々で、まっぼっくりをひろう子、木の枝をみつめて、それをもって葉っぱなどをはいて「おそうじ、おそうじ」という子など、いろいろいて、みんなでいっしょに遊ぶというよりも、1人で何か興味のあることをみつめて遊んでいる、という感じだった。

あの広い公園で、どこにいればいいのか迷ってしまい、「実習ママ」と言ってくる子どもとばかり遊んでしまったので、もっと他の子とも遊ばなければと反省した。

明日は子ども達の遊びの様子をもっと深く観察したい。

この日、実習生は乳児保育の内容としては大切な意味

を持つ「散歩」についていく。そこでは生活を共にしながら、そこで起こるひとつの出来事を通して、今までは知識としてあった「発達のコレ—子どもにとって意味のある人の獲得」ということと、具体的な出来事が結びつくことを知るのである。そして自分も「子どもから泣いて求められるような保育者になりたい」という思いが生じてくる。このように体験と知識を結びつけ、さらにそれを自分の生き方のなかに組み込んでいく作業、それを実習の大きな目的であると考えれば、実習はまさに学生の生き方を模索する機会となっているといえよう。

しかし実際の行動面ではまだまだうまく動けず、広い公園で子どもたちが楽しそうに自分たちの思うままに遊んでいるなかで、実習生は居場所がなくて困っている。けれども、この困惑は子どもと自分を考えた時に、どこにいたら子どもにとっても自分にとっても一番いいのかという保育・養育についての深い洞察の始まりなのでもあるといえよう。そして実習の初日と同様、側に来る子どもとだけかかわることになる。側に来てくれたことがうれしくて遊んでいたなら(視野がその子と自分だけになってしまった→実習生としては無理からぬことであるが…)、側にいた他の子がけがをしてしまう。そのところの反省をみておこう。

今日、1日御指導いただきましてありがとうございます。今日はあまり私の所にこないR君が「実習ママ」と言って寄ってきてくれたので、ついうれしくなって遊んでいたから、側にいた子ごろんで口びるを切ってしまい……、私をもっと注意していれば、と反省した。やはり、いっしょに遊びながらも、1人1人の子どもに対し目をいきとどかさなければいけないと思った。今日はK先生にいろいろ指摘されたので、自分の失敗を反省しながら、2度とこんなことをくり返さないよう、気持をピシッとひきしめました。明日もよろしくお願ひします。

自分の目の前で子どもがけがをした、そのことに気づかなかった自分を反省し、指導者からの注意もあり、保育者の仕事の重大さを思い、明日の実習へと意欲を燃やしていることがわかる。

実習も3日・4日目となる。そろそろ具体的な技術指導に入っていくことになる。実習生が「おむつ交換」を行なった日、このことについての感想をみることにしよう。

今日はオムツ交換もさせていただき、あー先生達をみていると、簡単そうにやっているけど、いざ自分がやってみるとむずかしいなと思いました。今日オムツ交換をした子ども達は、比較的交換台の上でおとなしかったのでよかったけど、これがあばれられたり、泣かれたりしたら、できるかなと心配です。本当にM先生の言葉通り、あせらずにやるのが大切なんだなあと思った。

今日は1歳児組全員のオムツ交換をして、来る時いやがられたZちゃんHくんは交換台にのせるとじっとして、反対に来る時はおとなしく抱っこされてくる、IくんSくんKちゃんの方が交換台の上であばれられて困ってしまいました。でも、H先生のをみている、あーこうやって歌をうたったり、手あそびをしてあげたらSくんなんか、いい子になってじっとしているんだなあと思いました。

明日からは、もっと落ちついてできるようがんばりたい。

技術指導（おむつ交換）については、指導保育者の配慮がうかがえる。最初に比較のおとなしそうな子から体験させて、それからクラス全体の子へというように……。おむつ交換はただおむつを交換すれば良いのではなく、それは保育者と子どもが信頼関係を形成する場のひとつであり、その関係がないとおむつ交換もうまくいかないことをアドバイスしながら信頼させるための試みを、2・3伝えている。そして、実習2日目に「自分も子どもから慕われる保育者になりたい」と思った実習生に、慕われる保育者になるためには毎日の生活のひとつの行為の意味を考え、技術がただの技術としてではなく、理論に裏打ちされた技術であるように、あせらずゆったりと正面からかかわることの大切さを助言している。ところで、おむつ交換に関する保育者のアドバイスはどうだろうか。

実習3日目で一日の流れを把握したところで、オムツ交換経験してもらいましたが、なかなか思うようにはいきませんね。子ども達も「実習ママ」だということをちゃんとわかっています。生活介助はまず言った様に信頼関係が結ばれて、初めて介助がスムーズにできます。10日間の中で、子ども達一人一人と関わりを積極的にもち、少しでも子ども達に近づけるよう頑張ってください。身体を使って遊んでみましょう。

オムツ交換時、動かれてしまい、とまどってしまってい

た様ですね。オムツ交換は1対1になれるので「スキンシップの場」とも考えられますね。あせらずに、ゆったりとした気持ちで、歌を歌ってあげたり、手遊びをしてあげたりしながら、交換する様にしましょう。あなたの笑顔を子ども達に沢山むけてあげてください。

次に4日目の日誌からみておくことにしたい。

人見知りの激しいH君が、今朝も先生を求めて泣きさけんでいた。見ていて可哀そうになる位、顔を真っ赤にして、涙をいっぱい流して泣いている。

今日は先生にこういう子こそ、スキンシップをたくさんもって触れ合わなければいけないと、教えていただきHくんをずっと抱っこしていた。最初は手がつけられない程泣き、またあばれられてしまい、本当に困ってしまいました。だが、そのうちテレビの画面に出ている動物をみせて話をしていると、だんだん落ち着いてきた。また、保育室にはある動物の絵や、窓ガラスについている動物をみせると「アーアー」と指を差して質問をするので、答えていたら泣きやんでくれた。そして質問する動物の鳴き声などを言ってHくんの体を揺らしてあげたりしたら、笑ったりもしたので本当にホッとした。Hくんは午後からはいつでも本当に落ちついて、Hくんの方から実習生のひざの上に乗ってきたりするのに、朝はなかなか慣ついてくれない。でも、今日ずっとHくんを抱っこして、はじめはやっぱり私では泣きやまないと考えていたが、時間はかかったが、最後には落ち着いてみんなの中に入っていくれて、ほんの少しだが自信がもてたような気がします。

子どもたちと共に生活するなかから、自分の担当の保育者を求めて泣く子に共感し、実習生として何とかしたい。側にいた他の保育者にも励まされて挑戦する。手がつけられないほどあばれる子に困りながらも、4日間の生活のなかから、初日は何をどう話かけて良いかわからなかった実習生も、子どもの行動の脈絡からその心の動きが理解できるようになっており、あれやこれやとかかわり方を模索しながら、子どもの不快（不安）をとり除いてあげようと努力した結果、時間はかかったが落ち着いてくれた体験を通して、少しは自信が持てるようになる。自分の努力したことが効果的であったということで、子どもとかかわろうと積極的になっていく。

特に、実習生が共に生活している発達初期の乳児では、

乳児の働きかけにきちっと答えてくれる応答的環境がその発達とりわけ自発的行動の発達には重要であるが、保育者としての発達初期にいる実習生にも同じことがいえるのではなかろうか。

実習5日目、この日で1歳児組での実習終了。そのことについて次のように実習日誌に書いている。

今日まで御指導いただきましてありがとうございました。今日からはじめてワゴンを押したのですが、あんなに重くなるとは思いませんでした。もうちょっと気を抜くとまがっていってしまい、押している時は顔が真険になってしまいました。でも、またやってみたいです。今日で1歳児組の担当が終ってしまい、せっかくみんなと慣れてきてHくんなどに泣かれずになったのになあとと思うと、少し残念です。しかし先生のおっしゃる通り、乳児院に実習にきたのだから、赤ちゃんの様子もみなければならぬと思いました。1歳児組と0歳児前半組では、全く様子がちがうけれど、はやく1日の流れをつかみ慣れるようにがんばります。またよろしくをお願いします。

実習6日目。

乳児（赤ちゃん）の抱き方というのは本当にむずかしいと思った。やっぱり先生の抱き方をみていると、しっかり包みこむように安定して抱いている。その点、私はまだこわごとと抱き、何度も抱き直したりしている。それが赤ちゃんにも伝わってしまい、赤ちゃんも不安になって泣きだしてしまうのかと思った。1歳児組の子ども達は体もしっかりして、抱いて体を動かしても平気だけど、0歳児組の赤ちゃんは体もフワフワしてやわらかいので、落とさないようにしなければ、とこればかり心配してしまう。やはりH先生に以前、教えていただいたように、抱くというのはスキップの1つだから大事にして、泣かれてしまったら、あやしながらも、その子どもの泣き方を観察できる位の余裕をもちたいものです。オムツ交換の時、YちゃんTくんの便をかたづけたのですが、便も乳児（赤ちゃん）と1歳児組さんとは全然ちがうのにびっくりした。Yちゃんの便をみた時、色が1歳児組さんと全然ちがうので、あー病気なのかなと思ったら、普通便と指示されたのでビックリしました。赤ちゃんはオムツ交換の時、立ち上ったり動きまわらないのにはホッとしました。まだオムツ交換（特に便の始末）

にはとまどって、スムーズに変えることができません。

この日の感想。

今日から0歳児組へと担当がかわり、同じ乳児院の中でも、こんなにもやることかわるものなのか、とビックリしてしまいました。1歳児組を担当していた時は、みんな小さいなあと思っていたのが、0歳児前半組にきたら、もっと小さく言葉も発しないのでとまどうことばかりでした。でもたった1年くらいで、あんなに大きくなるんだなあと思い、子どもの成長・発達というのは、著しくのびているということが実際に目で理解できました。はやく1日の流れをつかみたいです。またよろしくをお願いします。

この日の実習は昨日まで生活を共にした1歳児組と今日生活を共にした0歳児前半組の子ども達の比較から始まり、とまどいながらも、発達初期の子どもの成長の著しさに驚ろき、ここでは養成校で習得した知識としての「子どもの発達の姿」がそれなりに理解できている。

指導保育者からのコメントは次のようである。

1歳児組から0歳児前半組に移り、乳児の成長・発達というものをつくづく感じられたようですね。赤ちゃんは1年間で驚く程成長します。赤ちゃんが成長していく事を共に喜び乍ら、保母は、その手助けをしなければなりません、個人差はありますが、その子に応じた働きかけをすることが大切です。個々の発達段階をしっかり把握し、これからも頑張ってください。

また院長先生は「乳児保育は抱くことから始まるのです。抱き方の良し悪しでその子どもの情緒の発達の良否が決まると言ってもいいぐらいです」とコメントしている。

実習7日目からは技術指導（抱き方の指導、授乳の仕方の指導）が組み込まれる。

今日はE先生に、赤ちゃんの抱き方についてよく教えていただいたので、なんとなくスムーズに抱けるようになりました。授乳の時などは、保母も赤ちゃんもゆったりとした気持ちでいなければならない。そのためには抱き方がきちんとしていないと、赤ちゃんも落ちつかないんだろうなあと思った。まだ未熟なせいで、ミルクを飲ませている時、

同じ姿勢でのませていると、腕がいたくなってしまいますので。それで腕を動かしてしまうと、せっかくゴクゴク飲んでいる赤ちゃんが可哀そうなので我慢しているのですが…

横で、先生がミルクをのませているのをみていると、ちっともつらそうでなく、ゆったりとしっかりささえているので、すごいなあと思いました。何かいたくならないコツがあるのか、それとも慣れれば平気なのでしょうか。

ミルクの飲み方が3人共、とても良く飲んでいて、こっちがのみたくなる位おいしそうにゴクンゴクンと飲んでるのでうれしくなります。果汁もJくんなんか一気に飲みほしてしまうので、足りないんじゃないかと思う位のむのがはやいです。ただ、お湯は余りのまないので、やっぱり少しはのませた方がいいのでしょうか。お湯になると（果汁のあとのお湯）、舌で出してしまうのです。あと、排気もなかなか出すことができないのですが……。

みんなミルクを飲んでいる時は、手足を動かしても元気がいいです。

0歳児前半組での生活がまだ2日目だというのに、技術的なことに関してはそれなりに苦労しているが、そのなかでも他の先生の様子を観察する余裕があり、子どもとのかかわり方についていろいろの疑問もでてくるなど、さらに苦労しながらも、そのかかわりに喜びを感じている。

実習生の疑問に、指導保育者は丁寧にコメントし励ましている。

授乳ですが、まだ慣れず戸惑っていたようですね。しかし、午後には大分、慣れた様子でしたよ。がんばって下さい。Jくんも果汁にも慣れ、上手に飲んでますね。これも味覚の発達の一つですね。今までミルクだけを飲んでいて、お湯とは違いを感じ、飲みもかわります。2つの味の違いをわかるようになった、これも発達です。お湯もただの水分補給が目的でなく、授乳後のミルクかすなど残らぬよう、口腔内衛生を保つ為にも必要です。

今日はハンドリーガードも見られました。そういった細かな所にも目を向けて下さいね。

実習8・9・10日と安定した実習が続く、なにより実習生自身が実習先での生活にすっかり馴れ、子どもと行動を共にしながら、子どもの発達について、かかわりに

ついて実習生なりに再構成している。また指導保育者の適切な助言と励まし、子どもの笑顔に大きく支えられながら、今までの乳児保育に関する理論・知識を自分の生き方の中に組み込んでいっている様子がうかがえる。さいごに10日間の感想はどうであろうか。

10日間、御指導いただきまして本当にありがとうございました。アッという間の10日間で、あーやっ仕事の手順も覚えてこれからかなと思ったが、終わってしまったようでとても残念です。もっとやっていたかったです。

実習前、乳児院という所は、保母よりも看護婦の数が多いため、看護はしっかりと整っているが、保育という点では欠けていてスキンシップなども不足しがちであると教えられた。そのため、なんとなく暗く重苦しい所ではないかと想像していたのですが、こちらの乳児院の外装をみた時、それらの不安は一気になくなりました。

そしてオリエンテーション時に、園長先生のお話をうかがい、乳児保育というのは、子ども達の生命を守り育て人格形成をすることであり、またそうすることで保母の人格形成も築かれていると教えていただいた。その通りだと思った。保母がいい加減な態度で子どもに接すれば、その子どももいい加減な子どもに成長するだろう。特に乳幼児期というのは、子どもの接し方、言葉使いなどに、くれぐれも気を付けなければならないと思った。S乳児園の保母の方達は、みなさんとても明るく親切で、子どもに対する接し方も、本当のお母さんみたいだった。

私が感動したのは、18人のひとりひとりに担当の保母がいて、その子どもが退園するまで、ずっと担当するというシステムです。こうすることで、担当のママとつながりはより深くなり、本当に自分のママと子どもも思うでしょう。現に子ども達も、自分の担当のママを見つけると、甘えていたり、後追いをしたり泣いたりしている姿が何度も見られ、感動した覚えがあります。でも、担当のママだけでなく、すべての保母、栄養士の方達と信頼関係ができていて、施設にいるというよりも家庭の中にいるような、そんな暖かさが感じられました。

今、実習を終え、頭の中に浮かんでくることは、オムツ交換、授乳など、大変だったことはもちろん、やっぱり子ども達の笑顔がずっと忘れられません。私は前半はくま組と後半は観察組を担当できたのですがくま組の時はうさぎ組と関わりをもつことができ、観察組の時はひよこ組といっしょに遊ぶ、というように全てのクラスの子どもの名前



を覚えられ、関わりをもてたことはとても幸せでした。その中でも、特に印象的だったことはくま組を担当している時、人見知りの激しいHくんが泣き出してしまっている時、担当だった先生が「こういう子こそスキンシップを大切に、関わりをもたなくてはだめ」と教えていただき、ずっと抱いて言葉がけをしたり、外を見せたりしているうちに、落ち着いて泣きやみ、笑ってくれた事はホッとしたと同時に、うれしくなっていました。

また観察組を担当している時、いつもミルク、果汁、お湯などを飲ませようとする時泣き出してしまふHちゃんが抱き方などを変えて飲ませたら泣きやみ、ゴクゴクと飲んでくれた事も、大変うれしかったです。

私は今、つくづく保母という仕事は素晴らしい、また保母という仕事を選んで本当によかった、この道を選んでまちがいはなかったと思えました。先生方には御迷惑をかけたと思いますが、自分ではいい実習ができてよかったなあと思います。この経験を忘れずに、学校にいてもがんばりたいです。本当にありがとうございました。

## おわりに

これまで乳児院での実習について学生の日誌をもとに考えてきた。

ここから保育者が保育者として育っていくためには、保育者になろうとする者自らが、子どもとのかかわりのひとつひとつを体験しながら、知識・理論、そして理論に裏打ちされた技術を習得することに挑戦していかなければならないことが知られよう。

さて「社会福祉士及び介護福祉士法」の制定にともない、社会事業学校連盟はかなり厳しい実習基準<sup>10)</sup>を作成した。しかし、そのマニュアルには乳児院は抜けている。保育実習に関するテキストは多いが、総体的な記述が目立つ。今後に向けて、実習指導のためにこのような個別研究が求められているのではなからうか。

## 註

- 1-a) 本間真宏・岡本富郎共編：保育入門 小林出版（川崎）1984、1-b) 大場幸夫（代表）：保育実習の展開—(1)実習評価を中心に—全国保母養成協議会第23回研究大会発表論文集所収 1-c) 大場幸夫（代表）：保育実習の展開—(2)実習日誌を中心に—、保母養成研究年報第2・3合併号所収

全国保母養成協議会（東京）1985

- 2) 阿部和子：いわゆる「自主性」の問題について、大場・本間編著 子ども概論、蒼丘書林（東京）1986所収、また「子どもと保育研究会」の主催する夏季保育セミナーのレジメ（No.2, 3, 4, 6）を参照してほしい。
- 3) 三角同・保延成子：保育者養成と社会福祉実習、東京家政大学研究紀要第27集 1987所収
- 4) 教育・保育実習を考える会編：幼稚園・保育園実習の常識—成果をあげるポイント66、蒼丘書林（東京）1981 p. 42
- 5) その理由として考えられることは「可愛い」ということ、「いつか自分の子どもを育てるために」などが考えられるが、乳児院は数も多くなり、大体は第二、第三希望の所で実習することになる。なお<注1-a>の文献、及び教育・保育実習を考える会編：施設実習の常識—保母をめざす人のための66項、蒼丘書林（東京）1982、を参照のこと。
- 6) 全社協乳児福祉協議会編：全乳協30年史、全国社会福祉協議会（東京）1981、以下の叙述は本書に多くを負っている。
- 7) 本間真宏：社会福祉論—21世紀に向けて、相川書房（東京）1986、第IV章
- 8) 本間真宏：社会変動と養護問題、古川孝順他編 児童福祉の成立と展開 川島書店（東京）1975所収
- 9) これからの分析にあたっては、ひとりの実習生の日誌を素材にしている。この日誌を「評価」しているのではなく、あくまで実習生の眼をとおして「子どもとの出会い」を考えてみたいということである。なお<注1-a>の文献を参照のこと。さらに「実習日誌に書けなかったこと」については、三角同「保育実習の諸問題—実習日誌に書けなかったこと—」第41回日本保育学会発表論文集所収を参照のこと。
- 10) 日本社会事業学校連盟、全国社会福祉協議会・施設協議会連絡会：社会福祉施設等における「現場実習」指導マニュアル（案）、全国社会福祉協議会 1988